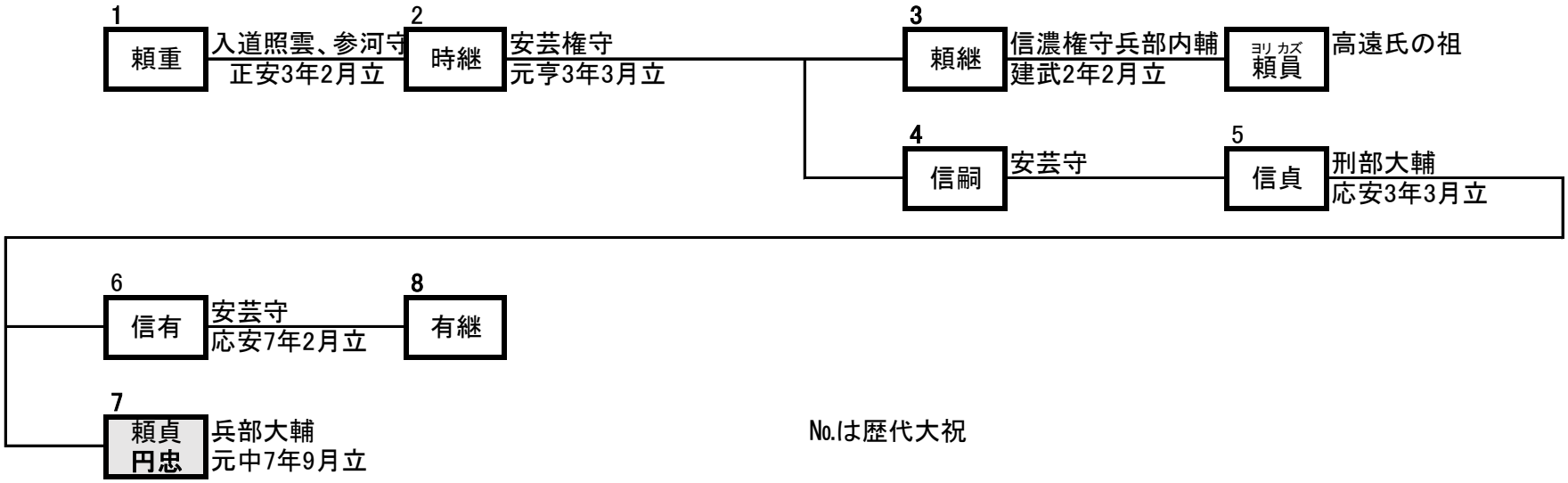
鎌倉末期以降の諏訪氏系図（円忠まで）と円忠の功績



3頼継は1頼重（中先代の乱の首謀）の孫に当りますが、頼継の子頼員（よりかず）は惣領家を継がず、伊那高遠地方の神領を知行して高遠諏訪氏の始祖
なり、その子孫は伊那地方で繁栄しました。この一件により7頼貞（**円忠**）の後は3頼継の弟4信嗣の系統が惣領家となり、その家系の刑部大舗8有継が
大祝（おおはふり）に就任しました。　※大祝→諏訪社の最高位の神職　『諏訪市史上巻：９２４P』より抜粋

円忠（小坂氏）は諏訪氏（神氏）の一族でその祖大祝敦忠が北条義時から小坂郷を拝領して後、小坂氏を称しました。円忠は鎌倉幕府の末、政所の所員て
鎌倉在住の諏訪氏族であった事が推測されます。「天隠語録」及び「神氏系図」には後、足利尊氏が夢窓疎石（国師）の薦めによって幕府の帷幄（いあく）に
参画させようと諏訪円忠を信州諏訪の草廬（そうろ）に尋ねて京都に迎えると、足利尊氏の右筆衆となりその帷幄に参じ,歴応元年（1338）には守護奉行に任じられ
全国守護の監督、遷転等を管掌しました。更に,暦応２年（1339）には京都嵯峨の天竜寺造営奉行となりました。

諏訪明神の縁起を知る上で最も貴重なる文献は円忠が著したとされる「諏訪大明神縁起絵詞（すわだいみょうじんえんぎえことば）であります。この書は元来
円忠の発願により著され、祭7巻・縁起5巻（１２巻）より構成され毎巻、皆筆者画家を分けて、画家には中務少輔隆盛、因幡守隆章、摂津守隆昌、郊貞法師等が
あり、筆者には近衛兼章、宮内卿行忠、青蓮院尊円親王、同尊道親王、久我内大臣、石山前大僧正、六条中納言の人々が上り延文元年（1356）１１月足利尊氏は
各巻に奥書きしています。　山田茂保著『諏訪史概』より抜粋

その後興国元年（1340年）には当地小津・玉津へ室町幕府奉行人・地頭職として着任して後、歴代在京のまま地頭職が続きましたが、長治の代で
現赤野井へ土着。応仁の乱以降途絶えていた長刀祭は諏訪徳治の代になり祭は復興されました。　【令和2年1月12日大本山天竜寺監修】